

マルクス、レーニンの切手とプロパガンダ

—杉原四郎没後 10 年を記念して

田中秀臣（上武大学）

1 報告の目的

杉原四郎（1920 生-2009 没）は、マルクス経済学、J. S. ミルや河上肇などの経済思想史研究、そして経済雑誌研究で著名だった。

杉原四郎の業績のひとつに、切手の研究がある。特に経済学への関心を中心にして各国の思想家、人物の切手を体系的に収集し、それをエッセイ、研究論文、書籍などとしてまとめた。代表的な著作としては、『切手の思想家』（1992）がある。

従来、日本ではフィラテリー（philately）を、単なる切手を集める“趣味”としての側面理解してきた。日本独自の用語として「郵趣」という言葉が、このフィラテリーの訳語として用いられていることがその証左である。だが、郵便学者の内藤陽介（2019）の指摘にもあるとおり、切手や郵便物は、複合的なメディアとして「国家や社会、時代や地域のあり方を再構成」し、また「歴史学・社会学・政治学・国際関係論・経済史・メディア研究など」の様々な分野を架橋する総合的な学問分野の基礎となりうるものである。フィラテリーのこの趣味と学術的研究の両面に、杉原四郎もまた配慮していた。

切手を対象にした文献を残した経済学者は、杉原四郎以外にも複数名存在している。カール・マルクスの肖像が描かれた切手を中心とした収集家として鈴木鴻一郎はその代表だった（鈴木（1959）、鈴木（1971））。また脇村義太郎は、切手収集の政治的、経済的、文化的な側面をコンパクトに分析した貢献で知られている（脇村（1967））。さらに近年では、R. ヘッカー・H. ヒューブナー・窪俊一（2008）が、マルクス一枚絵（カリカチュア）を解説した文献の中で、ステーションナリー類を含めてマルクス切手の多様な種類を提示している。

ただし今まで、経済学に関わった人たちを肖像とした切手や郵便物が、どのような政治的・経済的な利用のされ方をしてきたか、日本ではほとんど研究が行われなかった。

杉原四郎は『切手の思想家』の中で、「切手は単にわれわれの日常生活に役立つ実用的な消耗品であるだけでなく、国際的なコミュニケーションの一環をになう文化財でもあり、ある人物切手を発行することに、国家の政策的意図がこめられる場合もあるのである」と先駆的に指摘している。

本報告では、この「国家の政策的意図」を、主に政治的なプロパガンダの局面から考察する。経済学に関わる人物の中で国際的に絵柄が頻繁に採用されているマルクス、レーニンの切手に絞って、そのプロパガンダとしての役割を見ていく。

2 20 世紀におけるマルクス、レーニン切手とプロパガンダ

「マルクス切手」「レーニン切手」とは、以下では主に各政府が発行主体になったマルクスやレーニンの肖像を利用した切手のことを指す。マルクス、レーニンの事績そのものを記

念した切手（例：生誕記念、没年記念、彼らの著作や活動の記念など）だけではなく、各国の政治的イベントを記念するために発行された切手でも彼らの肖像が利用されていれば、ここでの考察の対象とする。またより広義にマルクスの発言や書影などを利用したものもマルクス切手とする理解（杉原（1967）など）や、さらに彼らの名称がついた建築物、大学、過去の住居などをデザインとした切手をもマルクス切手とする理解もある（ヘッカー・ヒューブナー・窪（2008））。ここでは、杉原の理解でマルクス、レーニン切手を定義してみたい。

まずこの観点で整理したマルクス切手は全世界で214枚、同じくレーニン切手は約800枚ほどだと思われる。世界全体の切手総数は約60万種といわれているので、両者合わせても1.6%ほどのシェアでしかない。例えば蝶の絵柄の切手は、2万種以上で、これに比較すればかなり少ない。ただし人物の肖像を描いた切手としては、エリザベス2世とダイアナ元王妃らイギリスの王族関係者を除けば、おそらく世界最高水準の発行種類となるだろう。特にソ連では、その建国から崩壊までの総切手種類の1割がレーニンとマルクスの切手である。発行国・地域も、マルクス切手は23、レーニン切手は52（推定）である。発行主体を国かそれに準ずる組織にすれば、主に社会主義国での発行が中心であった。ただしマルクス切手については、旧西ドイツや統一後のドイツ、キルギス、ロシアなど市場経済化・民主化された国家での発行が近年でも行われている。レーニン切手については、ソ連崩壊後では、ベトナムと一部の例外（20世紀の回顧切手の中での利用）を除いて発行はみられない。

切手のプロパガンダ利用を、古典的研究であるSTOETZER（1953）は、観光、宗教、共産主義振興、経済、文化振興などの側面で総合的に整理した。マルクス、レーニン切手の多くは共産主義振興（あるいは政治的利用）のためのプロパガンダ、そして補完的に文化振興的な面が目立つ。政治的利用としては、発行している政治的権力の正当性、権威の継承性を狙ったものが多い。例えばスターリン政権は、レーニン切手や関連する郵便物の発行によってスターリン個人の権力の正当性と継承を巧みに実現しようとした好例である。マルクスもレーニンも切手のデザインとして、世界各国でこの権力の正当性と継承性を目的にして発行を重ねていった。

世界最初のマルクス切手は、ハンガリー・ソビエト共和国で第一次世界大戦の直後（1919年）に五枚組ワンセットで発行されているが、このケースも正当性と継承性の両方を国民に教示するために発行されている。マルクス以外にエンゲルス、そしてハンガリーで民衆のために時々の体制に抵抗した人々（農民反乱の指導者や1848年の三月革命の指導者シャンドールなど）が図柄に採用されている。これはマルクス主義的な正当性とまた労働者や民衆の支持を現在の政権は得ているという正当性を明示している。同時に過去の「革命」の継承者でもあることを明示している。ハンガリー・ソビエト共和国はまもなく打倒されてしまう。続くハンガリー王国、そして第二次世界大戦後のハンガリー共和国の時代ではマルクス切手の発行はない。だが1949年にハンガリー共産党が権力を掌握し、ソ連の衛星国としてハンガリー人民共和国が成立すると、まっさきに発行されたのが、この最初のマルクス切手（と同じくシャンドール切手）そのものをデザインとする「ハンガリー・ソビエト共和国30

周年記念切手」(1949年3月発行)であった。ここには明示的に権力の正当性と継承性を国民に教示する狙いがある。特に注目すべきは、マルクス切手の横に描かれた民衆たちとその手にしている赤い旗である。これは現在の政権が民衆を基盤としていること、またハンガリー・ソビエト共和国時代の国旗と同じデザインのものを持たせることで、継承性を明示していると思われる。

図1：左が世界最初のマルクス切手(1919年)、右が1949年発行のハンガリー切手



世界最初のレーニン切手は、レーニン没後(1924年)に出された八枚組がある。またソ連ではレーニンの幼少期、青年期から最晩年までの肖像切手、彫刻や絵画の図案切手だけではなく、家族(両親、妻、兄弟ら)の肖像切手も積極的に発行した。同様の動きはマルクスでは限定的である(妻の肖像切手が東ドイツで出ている程度)。レーニンの血脈への重視(路線)は、現在の朝鮮人民共和国の金日成ファミリーの切手ほど神格化は徹底していないものの、独裁者の切手発行のひとつのひな型になっている。

スターリンはレーニンを自らの権威の正当性と継承性を際立たせるために、切手の世界でも積極的に利用した。スターリンの最初の切手は、レーニン没後10年を記念する六枚組の中である。スターリン切手を政治的プロパガンダの観点から分析したKolchinsky(2018)が指摘するように、この最初のスターリン切手には、1)権力の正当性、2)継承性、3)無謬性が込められている。特に図案では死せるレーニンは半透明に描かれることで、その神聖不可侵性(無謬性)が象徴されている。この権力者の横顔を複数重ねる図案(ダブルプロフィール型)は、このレーニン・スターリン図案切手が先駆的である。時にはスターリン、レーニン、マルクス、エンゲルスと四人の顔が並ぶときもある。また横顔の向きや重ね合わせる順番も重要である。例えば、レーニンとマルクスだと、ほぼ左向きでレーニンが前に出ている。マルクスからレーニンへの継承性を示しているのだろう。1965年には第六回共産諸国郵政大臣会議を記念して、世界9か国からほぼ同図案(マルクス・レーニンのダブルフェイス)の切手が発行され、共産国の国際的な連帯をアピールした。

左が最初のスターリン・レーニン切手（1944）、右はベトナム発行（1977）



またダブルプロフィール型だけではなく、各国で権力を得た政治家たちの図案切手で、レーニンやマルクスはその権威の正当性や継承性を示すものとして利用されている。図では、ホーチミンとレーニンの肖像切手を掲載した。これらレーニンと政治家たちを組み合わせた切手は、国家や党の記念行事の際に発行され、その正当性を裏付けている。また図案と一緒にではなくても、時の支配政党や権力者の肖像切手と同時に、マルクス切手やレーニン切手がワンセットで発行されているのも、やはり政治的なプロパガンダの利用例である。

なおスターリン自身の切手もソ連や社会主義国で多く発行されたが、「スターリン批判」以後は1, 2件の例外を除いてない。またソ連では、フルシチョフ以後の集団指導体制の確立に伴って、レーニン切手の発行が精力的に行われる一方で、フルシチョフからゴルバチョフに至るまで最高指導者の肖像切手は基本的に発行されていない。ソ連以外では、レーニンとブレジネフを組み合わせ描き、自国の共産主義国としてのアイデンティティを顕示する切手の例がある。

柏木博（2010）が指摘しているように、特に第二次世界大戦後はソ連の切手には、米国との競争や対立を象徴するような産業プロパガンダが目立つ。また宇宙競争を象徴する切手群もこの中に含まれるだろう。それぞれについてもレーニンやマルクスはその産業の成功や経済計画の正しさを担保するもの、宇宙開発の成功の守護者として図案化されている。自国の産業や経済の成果を強調するときに、マルクス、レーニンの肖像を利用することはソ連以外でも行われた。

マルクスもレーニンも主に政治的なプロパガンダを中心とするが、文化振興の面でも利用されている。例えば、チェコスロバキアのレーニン切手は同国の名画シリーズとして出ている。また各国のマルクス、レーニンの彫刻や周辺の景観を合わせた切手などもこの文化振興のプロパガンダとみなせる。ただしソ連や社会主義国の崩壊以後は、各国・各地でのレーニン像の撤去・破壊を契機にして、銅像や名称を利用した建造物の切手発行は絶えた。もちろん絵画切手としても発行されておらず、レーニン切手の文化的なプロパガンダは政治的なプロパガンダとともに現時点では、長く絶えている。マルクスはこの面では例外であり、世界的な偉人としての評価として現在も切手発行が継続している。

3 2018年の状況とこれからのマルクス・レーニン切手

2018年のマルクス生誕200年が、中国政府の習近平体制の自己正当化に利用されたことは各国で注目された。マルクス生誕200年というイベントは、またマルクス切手の在り方についても再考する機会となった。特に中国がドイツのトリーアに寄贈したマルクス像をモデルにした切手など二種類発行したことは注目に値する。ドイツではこの彫刻の寄贈をめぐって中国の政治的プロパガンダではないかとする論争が起きた(福島香織(2018))。いまだ政治的なプロパガンダとしてもマルクス切手は有効なのかもしれない。

ロシア、キルギス、ドイツ、ベトナムで出されているが、これらは政治的な意図よりも、むしろ現代の貧困や経済格差を問題視した現代でも生きる偉人としての面を強調しているように思われる。ベトナムの同時発行された切手帖にはそのような趣旨の解説があり、特に同国の政治体制や経済の方向性などを肯定する意図は明示的ではない。レーニン切手にはそのような意味での偉人としての再評価はなく、21世紀になってからはどの国からも発行されていない。ただし以下にある「いかがわしい切手」や私的発行のケースは別である。

世界の国々では自国内や海外とのやり取りで郵便を利用している。この郵便サービスの利用料として切手を封書やハガキなどに貼ることは世界共通の手法だ。もうひとつこの切手には重要な役割がある。それは“使われないでずっと手元に置かれていること”だ。これは切手収集の対象になるということである。切手の額面料金×売り上げ枚数から切手の製作・切手自体の配布などのコストを除いたものが、切手を発行する主体の利益になる。このことを「切手発行益」と表現しよう。切手のコレクターが郵便に利用しないで手元に切手をためておけばおおくほどに、この切手発行益は増加し、それだけ発行主体の儲けにつながる。特に外貨獲得はソ連など共産主義国の切手発行の主目的だった。モンゴルでも最初のレーニン切手を、60年代、70年代は国内で見たことがないという証言もある。また国によっては厳密に、外貨獲得のための切手と郵便に利用する切手とを別建てで販売しているところも多い。これを「いかがわしい切手」という(内藤陽介(2011)参照)。

マルクス、レーニン切手でも「いかがわしい切手」は健在である。その候補は、シエラレオネ、ギニアビサウ、コンゴ共和国、コートジボワールといったアフリカ諸国である。特にこれらの国々は最近、中国との経済的結びつきを強めている。コンゴの場合では、マルクス生誕200年と毛沢東生誕125年を組み合わせ、両者を一枚の切手シートに描いている。ちなみに中国では毛沢東生誕125年記念切手は今のところ出されていない。他方で、中国では今も毛沢東人気は国民の間に根強い。そこで本国の不足感を狙った発行だとみていいかもしれない。またマルクスファンの需要も同時にみたす大胆な戦略である。また私的発行でカナダ、ルクセンブルクなどでマルクス切手の発行があった。日本のフレーム切手と似た仕組みでの発行である。

マルクスもレーニンも切手の世界で(も?)なかなか死なないのである。

*詳細は学会時に配布予定の論文に記載。参考文献もその論文を参照願います。